



A L P S CAREER

<シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第38回>

57歳で 民間企業に転職

公務員として 積み上げた経験を武器に



堀 博晴

特定非営利活動法人ローカルガバメント・ネットワーク
理事長

【ほり ひろはる】昭和22年11月7日生。昭和42年4月、江戸川区役所に入都以降、東京都総務局小笠原支庁、同和对策部、災害対策部等を経て、平成8年4月より東京都主税局足立都税事務所整理第二課長。その後、同課税部軽油特別調査室副参事、同徴収部機動整理課長、同徴収部徴収指導室長等を歴任し、平成17年3月東京都退職。同年4月、ヤフー株式会社入社（官公庁担当）。平成23年10月からNPO法人ローカルガバメント・ネットワーク理事長。平成24年11月ヤフー株式会社退職。また、厚生労働省国民健康保険料（税）収納率向上アドバイザーとして東京都をはじめとする全国の自治体で講演、徴収業務を通じて、公務員の意識改革を実施中。著書に『インターネット公売のすべて 徴収率アップの決め手』（ぎょうせい、2006年）、『インターネットが変えた！自治体増収大作戦』（ぎょうせい、2008年、共著）がある。

表題のテーマでこの原稿の依頼が来た時、私はお断りしようと考えていました。しかし、57歳で公務員を退職して民間企業に転職した私の公務員生活と、ヤフー株式会社に行つてからの私の仕事を書くことで少しでも現役の公務員の皆さんのお役に立てればという思いと、平成24年11月でヤフーを65歳で退職する記念として冥土の土産にでもなればと思ひ立ち、お引き受けしました。以下、拙い文章ですがお付き合いください。

入都から小笠原赴任

私は1967年に入都し江戸川区役所に配属されました。選挙管理委員会事務局から公害対策までさまざまな仕事をしていましたが、公務員としての仕事にどこか飽き足りなさを感じ始めていました。

そんな時期、都職員に配布されていた『週刊とちよう』の記事の中に「小笠原支庁への赴任職員募集」の見出しに目が止まり、私はすぐに手を上げました。しかし、当時の江戸川区の人事からは「梨の磔つらばて」でした。しばらく経ったある日、課長から区長室へ行くようにと言われ、行ってみると人事のお偉い方が何人かいて、区長室に入るよう促されました。緊張している私に区長は、「なぜ小笠原に行きたいのか？」と問われました。まさか区長にそんな質問をされると思っていなかった私は一瞬言葉に詰まりましたが、「自治の原点が見たいからです」と答えました。すると区長は人事課長らに「行かせてやりなさい」と命じてくださったのです。

プロになる!!

1974年に初めて小笠原に赴任して以来、10年間のうちに行ったり来たりで3回（7年）小笠原に配属されました。最初の配属は小笠原支庁母島出張所（3年）で、次が小笠原村役場への派遣（2年）、最後が小笠原支庁港湾課（2年）でした（内地では総務局統計部2年、総務局電子計算課1年）。

私はこの小笠原で公務員の原点を学んだと思っっています。「人生の生き様は、この小笠原で決まった」と言っても過言ではありません。

当時母島にあった公立の診療所は、ドクター1人、看護師1人の体制でした。ドクターは信念のある豪快な方で、私のことを



気に入ってくれていました。診療所は人手が足りなかったこともあり、島を訪れた観光客が虫垂炎で担ぎ込まれた時など緊急の場合は、私のできる範囲でお手伝いをすることもありました。

そのドクターが休暇中の、ある冬の夜のことでした。島の妊婦が産気づき、赤ん坊を取り上げなくてはならなくなりました。私は診療所に駆けつけました。通例として代わりのドクターは島に呼んであったのですが、妊婦を診察したところ逆子であることがわかりました。すでに破水しており、帝王切開しなければ母子ともに危険な状態です。そのドクターは「父島に行つて手術するしかない」と言い、私もそうするしかないと思いました。母島から父島までは船で3時間、向こうに着けばドクターがもう1人、看護師も数人います。

しかし、その晩の海はひどい時化でした。漁師たちも絶対漁に出ないような猛烈な嵐でした。私は漁業協同組合長の家へと走り、事情を話して「船を出してもらえませんか」と頼みました。組合長は少し考えて「よし、出す！」と応じてくれました。

あの時のことは今も忘れません。ドクターと看護師と妊婦、それに私は小さな漁船に乗り込み、組合長の舵取りと運に

すべてをゆだねました。激しく吹きつける波と風。よく「木の葉のように船が揺れる」と言いますが、そのとおりでした。母島と父島の間には「湾とね」と言われる潮の流れが速い難所があつて、そこをなんとか抜けるかどうかに全員の命が懸かっていた。

その時一緒だった看護師は博美さんと言います。私より少し年上の女性で島の出身ではありません。彼女がめつぼう船に弱い人だということを私は知っていました。その博美さんが、揺れる船で妊婦に付きつきりでいました。ひどい船酔いで何度も吐き、自分で吐いた物にまみれながら、それでも片時も妊婦から離れず、必死で励ましているのです。博美さんの姿を見て、私は体が震えるような感動を覚えました。

なんとか難所を越え、父島に船が着くと、すでに連絡を受けた人が待ち構えています。診療所に妊婦を搬送して、直ちに手術が始まりました。私は手術室に入って血圧を見ていました。しかし、おなかを開くと、子供はすでにチアノーゼの状態で、体は紫色、呼吸もしていませんでした。

「死産です」と医師が言い、小さな体がお盆に載せられました。2人のドクターと看護師は母親の手当てに取り掛かりました。がつくりきた私は言葉もなく、ときどきが

血圧計に目をやりながら、お盆の上の赤ん坊を見ていました。すると、かすかにではありますが、ピクツと赤ちゃんが動いたよう

な気がしたのです。

まさかと思つて「博美さん、動いたよ」と声をかけました。博美さんはこつちを振り向くと、手袋をした手を下ろし、すばやく赤ちゃんに駆け寄りました。息をのんで見守る私の前で、彼女は赤ん坊を抱きしめ、その口や鼻に自分の口をつけて、喉や鼻に詰っていたものを吸い出し始めました。吸つては吐きを何度か繰り返すうちに、赤ちゃんの体が見る見るピンク色に変わっていくのがわかりました。

命を落としかけた赤ん坊が蘇つていく瞬間と、それを懸命に助けている博美さんの仕事を目の当たりにして、私はまた感動しました。涙が止まりませんでした。

私の中で、公務員のプロになろうという意識が芽生えたのは、この出来事がきっかけでした。

それまで「小笠原復興対策に尽力したい」と口では言っていました。公務員って何だろう、プロフェッショナルの仕事とは何だろうなどと真剣に考えたことはありませんでした。プロ意識なんて微塵もありませんでした。「ただ上司に言われたことをやる」

「今、目の前にある仕事をやつつける」。その程度の認識で、むしろ、せっかく離島にいるのだから、その間くらいたっぷり遊んでおこうと思つていたほどでした。

けれども、博美さんのプロの仕事を間近で見得からは、考えが変わりました。島の診療所の看護師である博美さんと私は同じ



公務員です。彼女だけがプロではない。私もプロにならないければならないと心の底から思いました。

内地に戻ってから

その後、私は内地に戻り、総務局で同和対策、災害対策、福利厚生事業団を経て主税局に移ってからは緊急税収確保対策と「対策」と名の付く仕事をしてきました。

これらの職場にいた時も、公務員はプロフェッショナルでなければならぬと自分に言い聞かせながら働いてきました。どこに異動しても、1日でも早く仕事を覚え、自分の良いところはさらに磨き、悪いところは改善する。役所はチームワークですから組織の中で突出する必要はありませんが、いつも危機感を持って、役所全体、まち全体のことを考える。そして私たち一人ひとりが自分の職務について、どうしたら効率的・効果的な仕事ができるかを一生懸命考えていくことがプロの公務員だと思いつながら仕事をしていきました。

ヤフー株式会社に行くきっかけ

そんな私がヤフー株式会社（以下「ヤフー」）に転職したのは、主税局でインターネット公売を考案したのがきっかけです。

私はどこに行ってもプロになろうという思いはありませんでしたが、管理職になるという考えはありませんでした。しかし、上司に試験を受けるよう命令され、2度目の挑戦で受かり

ました。そして異動した先が主税局でした。

新米管理職としての仕事は都税の滞納整理でした。心では「なんで俺が金取りをしなければならないんだ」と思いましたが、愚痴を言っても始まらない。「徴収のプロになつてやる」と思い直し法律を見ました。そこで「国税徴収法」という法律を読んだ時、目からウロコが落ちました。この法律どおり仕事をすれば、税の滞納は確実に減らすことができると思いました。

この法律には「滞納をしたら財産を調査して差押え（滞納処分）なさい。そして、財産が無いなどの条件があれば、滞納処分の停止をする」と書かれています。この仕事を確実にやつていけば滞納は無くなるのです。

しかし当時、東京都の滞納額は固定資産税を含め2400億円もあり、徴収率は90・2%という低いレベルのものでした。差押えも停止もほとんどやっていない状態の現場でやることは一つ「法律どおりやること」でした。

差押えれば必ずと言っていいほど滞納者が怒鳴ってきます。しかし、90%以上の納期内納税者がいること、滞納すれば差押えなければならないこと、さらに高い延滞金を払わなければならないことを話すことで、徐々に徴収率が上がってきました。

私の本庁の機動整理課長だった時、職員が差押えてあった日本画を、不動産公売に合わせて出しました。最初の公売で見積額は二十数万円くらいに設定しましたが、落

札されませんでした。2度目は少し値段を下げて出しましたが、買手は付きませんでした。3度目、見積額を8万8000円に下げて出し、ようやく9万円で売れました。売却が決まってホッとしたもの、税収は見込み額の半分でした。

なんとか高く動産を売れる方法はないものかと思案している時、職員が「うちの両親がヤフオクに凝っているんですよ」と言ったのを聞き、私の頭の中で、ある記憶がよみがえりました。実はうちの息子も大手運送会社からもらったミニカーをヤフオクに出品したところ、1万円の値が付いた話をしていたのです。

さつそく私は職員にヤフーに連絡してもらい、開発が始まりました。2003年11月のことです。ヤフーがシステム開発を、東京都が法律関係を担当し、インターネット公売という道具を手に入れました。

それから8カ月経った2004年7月15日、インターネット公売が無事リリースされました。出品はロールスロイスやグラブドピアノなど20点あまり。当時の石原都知事が記者会見で発表したこともあり、マスコミがこぞ取り上げてくれて、申込者は2966人もいました。入札は同年8月10日から48時間行われ、落札額はトータル1657万2832円、見積価格の410万円の約4倍となりました。私は「インターネットってすごい」と心底、思いました。その後、私のところには全国の自治体か



ヤフー公売オークションの画面

らの問い合わせが殺到し、その対応に追われたことを思い出します。

インターネット公売が成功した後、私は徴収指導室長という職につきました。定年までには3年が残されていました。しかし、このまま公務員の定年コースを歩むよりも、今ここでヤフーに移り、3年間でインターネット公売を全国に普及させられれば、60歳まで意義ある仕事ができるのではないかと考えました。

決意を固めた私は、自宅のパソコンでヤフーのトップページを開き、採用情報の表示から応募フォームに入っていきます。フォームに、インターネット公売を全国に広めたいこと、公有財産を売却するシステムをつくりたいこと、公金の支払いをヤフー

の画面からでもできるようにしたいことなどを入力し、書いた内容を家内に見せました。「これで良かったら、送信ボタンを押してください」と言った私に、家内は「心してやったほうがいいわよ」と言いながら送信ボタンをクリックしてくれました。それから1週間後、ヤフーの面接が

ありました。応募の際に私が提案した「キヤンピングカーで全国を営業して回る」というアイデアは却下されましたが、57歳のオヤジをヤフーが採用してくれることになりました。

ヤフーのオヤジになって

ヤフーに入ってから間もなくはインターネット公売の営業を1人でやっていました。

私がヤフーに入ったことをマスコミが取り上げてくれたこともあってか、営業に行くと公務員の皆さんは温かく迎えてくれました。その一方、皆さんが口を揃えて言っていたのは「インターネット公売を契約したのだけれど、敵は内部にいる」ということでした。インターネット公売を実施するためには、財政担当者やホームページの担当者などと調整を図らなければならないのですが、担当者は余分な仕事を持ってきたという感じで接するというのです。私もインターネット公売の開発をしている時には規則の改正やらセキュリティの問題などで「やらないで済む理由」を探す公務員と渡り合ったことを思い出しました。

1人で営業にいくという手法では効率が悪いことがわかったので、ヤフー主催の「徴収セミナー」を開催することにしました。自治体の方々を一堂に会して、徴収という仕事の大切さ、法律どおりに仕事をすれば確実に徴収率が上がることなど私の経験をお話しし、差押えた不動産や動産はインター

ネット公売に出していただくようお願いしました。

このセミナー開催をきっかけに、全国各地から講演の依頼が舞い込むようになりました。講演先には、公務員の仕事の中でも嫌な仕事のひとつである「徴収」という仕事に懸命に取り組んでいる熱い職員の皆さんがいました。その熱意ある方々とヤフーグループでのマーケティングが始まりました。

今、このマーケティングリストで、北は北海道から南は石垣島まで200名を超える仲間が日々直面する問題や情報交換のやり取りをしています。さらに、この仲間たちが手づくりの全国研修大会を開催するまでになりました。私はこういう仲間と触れ合うたびに、公務員もまだまだ捨てたものではないと強く思っています。

地方から日本を元気に!!

おかげさまで、インターネット公売の契約は1000自治体を超えました。それと同時に、この道具を活用し、徴収率を確実に上げている自治体が増えてきています。

財政状況が厳しい中、国からの交付金や補助金が削減される状況で独自財源を確保するには、税をはじめとする債権を確実に収納していくことだと思います。

今、国政は混乱し国が疲弊していく感がありますが、国を当てにせず地方から日本を元気にしていこうではありませんか。

vol.3
フィルムになった風景

数多くの映画の舞台となっている
「旧門司食糧倉庫」

丸2日市街地を全面封鎖して撮影された
「旧戸畑区役所」

北九州市の“エース物件” 旧門司食糧倉庫

北九州市

日本で初めてフィルム・コミッション組織を立ち上げ、メインストリートでの駅伝シーンの撮影や空港での国内初の本格的なハイジャックシーンの撮影、街全体を終日封鎖しての撮影等、次々と派手なロケを成立させてきた北九州市。その北九州で“エース物件”といわれるのが、この旧農林水産省福岡食糧事務所門司政府倉庫（以下「食糧倉庫」と略）です。

食糧倉庫は、米穀法に基づき1928年に政府買入米の長期備蓄倉庫として建設され、10棟・床面積約1万㎡に及ぶ大規模な倉庫群です。現在は使われていませんが、レンガ色の切妻屋根と白いタイル壁の倉庫が立ち並ぶ光景は当時の面影のままで、歳月を経た味のある重厚な建物と外部から取り残されたよ

うな静謐さに満ちた空間は、ロケに訪れる映画関係者を魅了してやみません。

三谷幸喜監督のオリジナル・ノンストップコメディ『ザ・マジックアワー』



『ザ・マジックアワー』では倉庫脇で車の炎上シーンを撮影

では、架空の港町・^{すかご}守加護の倉庫街という設定で、伝説の殺し屋「デラ富樫」を演じる売れない俳優・村田大樹と本物のデラ富樫が撃ち合いを演じるシーンが撮影されました。設置された看板が弾着で弾けたり、車が爆破されるなど、クライマックスを飾るにふさわしい派手な撮影となりました。

また、海猿シリーズの^{はすみ}羽住英一郎監督の『おっばいバレー』

は、新任女性教師の顧問のおっばいが見たい一心で部員たちが練習に打ち込み、別人のように強くなっていくという、北九州を舞台にした青春エンターテインメントの傑作ですが、部員たちが集まるアジトとして撮影されました。1979年の設定で撮影され、レトロな倉庫と古いオート三輪があいまって懐かしい昭和を感じさせる映像になっています。

このほか、『サッドヴァケーション』『初恋』等、様々な作品の舞台として撮影されています。

一方、旧戸畑区役所は、1933年に旧戸畑市が市役所として建設した庁舎です。昭和初期に流行した「帝冠様式」という、和洋折衷の独特な様式となっており、当時流行した赤いタイル張りの外壁と白い軒・窓枠とのコントラストが映える昭和初期の面影を残す重厚な建物です。

この旧戸畑区役所の前面道路および交差点を完全封鎖して撮影を行ったのが、望月三起也原作のアクション漫画を映画化した羽住英一郎監督の『ワイルド7』です。前面道路や交差点を丸2日封鎖し、銀行を襲撃した強盗たちが警察の包囲を突破して逃走するシーンの撮影を行いました。

ここでの撮影は、過去何本も北九州で撮影し北九州を熟知する羽住監督から、ぜひ旧戸畑区役所を使いたいという要望を受け、それに応えた

ものですが、戸畑の市街中心部だったため、路線バスを2日間計500本も迂回していただくなど、市民の皆様の多大なご協力を得て、ようやく撮影に漕ぎ着けることができました。



『ワイルド7』では丸2日市街中心部を全面封鎖して撮影

また、電器メーカーの技術者が老人にロボットを演じさせてしまうという痛快ドタバタ・コメディ『ロボジー』では、老人が入ることになるロボット「ニュー潮風号」の研究開発室として撮影されています。

今回ご紹介しきれなかった映画の舞台が、北九州にはたくさんあります。ぜひ一度、「映画の街」北九州へお越しください。

(執筆/北九州フィルム・コミッション 坂上秀之)

- ◆映画『ザ・マジックアワー』2008年6月公開
監督：三谷幸喜
出演：佐藤浩市、妻夫木聡、深津絵里、西田敏行ほか
- ◆映画『おっばいバレー』2009年4月公開
監督：羽住英一郎
出演：綾瀬はるか、仲村トオル、青木崇高ほか
- ◆映画『ワイルド7』2011年12月公開
監督：羽住英一郎
出演：瑛太、椎名桔平、深田恭子、中井貴一ほか
- ◆映画『ロボジー』2012年1月公開
監督：矢口史靖
出演：ミッキー・カーチス、吉高由里子、濱田岳ほか